

# JRTT共有船ニュースレター (VOL8) 創刊1周年

## 「せとうち島塾」に参加してきました！

『せとうち島塾』とは、少子高齢化が進む瀬戸内エリアの未来を考え、観光のみにこだわらない地域の活性化やSDGsについて考える機会の創出を目的として、香川県丸亀市の塩飽(しわく)諸島にある広島(さぬき広島)を舞台に、本州四国連絡高速道路(株)が昨年からはじめた取り組みです。6回目を数える今回は、6月8日(木)~6月9日(金)の2日間にわたり開催され、国の機関や自治体、NPO、民間などから計19名が参加しました。JRTTも初めて参加し、地域活性化の現場を体験してきました。

塩飽諸島の広島は、丸亀港からフェリーで約45分、または軽合金製の旅客船で約20分の距離にあり、参加者(塾生)は、本年2月に就航したばかりの備讃フェリー株式会社とJRTTの共有船フェリー「ひろておん」に乗船して、現地に向かいました。⇒「ひろておん」の紹介(ニュースレターVol.6)は[こちら](#)

『せとうち島塾』では多くの野外活動が行われ、塩飽諸島最高峰の王頭山(おうとうさん、標高312m)の登山道を清掃・整備するクリーンウォーク、海岸の生態系を調べるタイドプールチャレンジ、漂着するプラスチック類などの海ゴミ調査、島民との交流などを通じて、離島が抱える現状や問題点などを学びました。終始、地元島民代表の通称「アンクル・ファイブ」(島の自治会長など多芸多趣味の70歳前後の男性諸氏5名)がインストラクターとして随行し、優しく、時には厳しく(?)、塾生をサポートしていただきました。

また、座学講義では「JRTTの船舶共有建造事業と離島航路旅客船への支援について」と題したプレゼンを行ったところ、塾生からは「新幹線の事業は知っていたが、船舶の事業は知らなかった。JRTTの業務を理解することができた。」とのお意見もいただきました。「ひろておん」乗船とあわせ、全国各地の交通ネットワークづくりに貢献していくJRTTの役割についての理解を深めていただけたものと思っています。

今回の『せとうち島塾』の様子は、KSB瀬戸内海放送のニュースでも報道されました。⇒[動画配信はこちら](#)

男性記者(K.N)



丸亀から広島(さぬき広島)までの航路

写真提供(右下を除く):本州四国連絡高速道路(株)



クリーンウォークで  
草刈り体験



王頭山山頂から見える  
瀬戸内海は絶景



「アンクル・ファイブ」の皆様の雄姿



海ゴミ調査では、きれいに思われた砂浜でも多くの漂着ゴミを発見



JRTTによる講義の様子



島民の足として活躍する  
共有船「ひろておん」  
(写真:備讃フェリー(株)提供)

## 共有船関係者からの寄稿～離島航路の明るい話(福岡県宗像市)～

JRTT共有船部門の業務活動に関わりがある、九州産業大学地域共創学部地域づくり学科講師行平 真也(ゆきひらまさや)様に「離島航路における明るい話」をご寄稿いただきました。

離島航路は離島の人口減少や少子高齢化に伴う島民の利用者の減少により大変厳しい状況にあることは皆様もご存じのことと思います。新型コロナウイルス感染症の感染拡大下においては、医療体制が脆弱な離島では来島自粛をお願いした島も多く、その厳しい状況に輪をかけて利用者数が激減した航路が多くあります。もちろん、その当時においては感染を防ぐためには必要な措置だったと思います。現在、新型コロナウイルス感染症は発生初期から3年以上が経ち、今までの日常の生活が少しずつ戻ってきました。

離島航路については前述のように厳しい話が多くありますが、そんな中でも明るい話題をとのお声をJRTTの方からも頂き、私が最近お聞きした福岡県宗像市神湊と大島を繋ぐ大島航路の話をご紹介します。

宗像市大島は宗像市神湊港からフェリーで25分、周囲15km、人口約700人の島であり、2017年に世界遺産に登録された「神宿の島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の構成資産である「宗像大社中津宮」や「宗像大社沖津宮遙拝所」があります。このように観光資源がある島ですが、新型コロナウイルス感染症により航路利用者が減少しており、航路経営は厳しい状況に追い込まれていました。ここまでは多くの離島航路と共通する話だと思います。

しかし、2023年1月下旬ごろから大島の観光客では珍しい若い方が増えてきました。宗像市元氣な島づくり課の職員さんが、若い観光客が増えていることを不思議に思い、観光客の方になぜ大島に来たのかについて色々聞かれたところ、「TikTokを見てきた」とロクに話されたとのことでした。

職員さんがTikTokを調べてみたところ(皆様もぜひTikTokで「宗像 大島」とご検索ください)、大島の観光を紹介するショートムービーがバズっており(多くの人に拡散され、注目を浴びるという意味)、この原稿を執筆しているときには、その動画1本は約36万再生、約1.2万のいいね(♡)がついていました(2023年6月7日現在)。大島の人口が約700人、大島航路の年間の乗客数が約23万人(2019年度)ですから、凄まじい再生数と言えます。その動画を見た方々が大島に行きたいと思い、実際に多くの方に訪れて頂きました。

この現実を目の当たりにした宗像市職員の方々はSNSの力を再認識し、さらにPRに力を入れていく中で、2023年3月の乗客数はコロナ前をはるかに超え146%増となりました(15,021人→21,987人)。島民の方も観光客の増加を実感しており、「若い人が増えてきた」とロクに話していました。観光客が増えたことで、土日には行列が出来る飲食店もあるそうです。私自身、他の自治体の視察に同行する形で2023年3月に大島に渡りましたが、帰りの船は座席が満席となり、立ち席となりました。特に若い女性のグループのお客様が多く、離島航路ではあまり見慣れない光景でした。

このように瞬間的かもしれませんが、離島航路の利用者が増えた好例です。この勢いが継続し、多くの観光客の方に訪れて頂ければと思うばかりです。

離島の人口が減少していく中で、航路利用者を増やすには交流人口を増加させることが一つの方法です。新型コロナウイルス感染症により一時的にそれが止まっていましたが、可能な島から、徐々に交流人口を増やす取り組みを再開していくことが重要ではないかと思います。

また、宗像市職員の方が若い観光客が増えていることに関心をもち、観光客に話しかけてみられたのは本当に素晴らしいことと思います。島で起きていることを自分ごととして捉える職員の方の存在は離島振興において何よりの存在です。

今回は福岡県宗像市大島の明るい話題を書かせて頂きました。ぜひ福岡県にいらっしゃることがありましたら、大島に足を運んでいただければ幸いです。



行平真也(ゆきひらまさや)

- 九州産業大学地域共創学部地域づくり学科講師
- 専門分野:海上交通論(離島航路、フェリー)



宗像大社沖津宮遙拝所



大島風車展望所

## 共有船「はやぶさⅡ」のご紹介

2023年4月4日に青函フェリー(株)とJR TTとの共有船「はやぶさⅡ」が函館～青森航路にて就航しました。「はやぶさⅡ」は約25年に渡って青函航路を結び今年3月に引退した「あさかぜ5号」に替わる新造船で、船も一回り大きなものとなり、あわせて定員、搭載車両数も増えています。青函フェリー(株)が運航する青函航路は、北海道と本州を結ぶ重要な物流ネットワークのひとつであり、「はやぶさⅡ」の他に「3号はやぶさ」、「あさかぜ21」、「はやぶさ」(共有船)の計4隻、1日16便の運航によって支えられています。フェリーと聞くとトラックや乗用車の輸送手段といったイメージがありますが、初めて乗られる方には船旅の楽しさや新鮮さを伝えてくれる船です。また、普段から青函航路を利用されている方にはさらなる快適さと便利さをもたらしてくれる船ですので、この場を借りてご紹介させていただきます。



ターミナルで乗船手続を済ませ、いざ「はやぶさⅡ」に乗船します。函館港では船首側ランプドアより、青森港では船尾側ランプドアより乗船します。函館港で正面から間近で見る「はやぶさⅡ」は大きくも精悍な印象でした。明るくて広々とした車両甲板脇の通路を通って客室フロアへ進みます。



2階客室フロアに繋がる階段を見た時が、旅客船に乗船したことを感じられる瞬間です。「はやぶさⅡ」の船内デザインには壁面におんこの木が取り入れられ、親会社の栗林グループ各社の社章である伝統の〇七マークと丸みのある英字フォントからは、落ち着いた暖かみのある印象を受けました。



フロアにはJR TTのロゴ入りのプレートも掲げられています。このプレートは「はやぶさⅡ」が多くの関係者のご支援、ご協力のもと、船主及び運航者である青函フェリー(株)、建造造船所である函館どつく(株)、そして、JR TTが技術力を結集して建造した共有船であることを表しています。



「はやぶさⅡ」の客室には、リクライニング機能付の2等椅子席、カーペット敷の2等(女性専用室あり)、乗船時にエレベーターを使い段差なく入室出来るバリアフリールームがあります。また、ベッドが用意されたドライバーズルーム、ステートルーム(個室)があり、シャワールーム、自動販売機、喫煙室といった設備も設置されています。



2等椅子席



2等船室



バリアフリールーム



豪華なステートルームは「はやぶさ」、「はやぶさⅡ」に設置されており、青函フェリー(株)利用時の快適さをアップさせたものとして定評があります。家族やグループでの利用、出張中に業務に集中することや、必要に応じて休息を取るといった使い方も出来ます。より快適な空間で移動出来るため、旅行前に移動の疲れを出さないことや、旅行帰りに疲れた身体をゆっくり休ませることも出来ます。「はやぶさⅡ」に乗船される際には、記念に是非おすすめしたい客室です。



函館港を出港した後、北海道の松前半島を過ぎ、青森県の下北半島と津軽半島の間を通過して陸奥湾へと進みます。従来船から船首形状の変更、船底構造の見直しがなされ、乗船当日は津軽海峡でもほとんど揺れを感じない、上品な乗り心地でした。移りゆく景色をデッキから見渡せることは船旅の大きな魅力のひとつです。



目的地である青森港の手前で共有船「はやぶさ」とすれ違いました。「はやぶさ」も「はやぶさⅡ」も港で見ていると船の大きさに目がいきますが、海上を航行する姿を見ると、その大きさもさることながら船型のスタイリッシュさが目立ちます。一目で青函フェリー(株)の船と分かる伝統のデザインと船型で、ファンネル(煙突)には〇七マークが取り付けられています。あらためて美しい船だと思いました。



共有船「はやぶさ」



令和4年11月の進水から心待ちにしていた「はやぶさⅡ」がこの度無事に就航しましたことには、JR TTと共有建造いただきました青函フェリー(株)及び造船所である函館どつく(株)に感謝申し上げますとともに、建造に携わられた全ての関係者様に心より御礼申し上げます。函館生まれの「はやぶさⅡ」が、これからは函館育ちの船として、多くの皆様に見守られ、期待に応え続けていくことを願っています。「はやぶさⅡ」、そして乗組員の皆様、ご利用者様の今後の航海のご安全を心よりお祈り申し上げます。

男性記者(K.F)



共有船「はやぶさⅡ」  
写真:青函フェリー(株)提供

## 理事長からのメッセージ

JRTT 藤田耕三理事長からのメッセージです。



JRTT本社にて撮影

鉄道・運輸機構は、明日を担う交通ネットワークづくりに貢献することを使命とする独立行政法人です。

今年10月には、設立20年を迎えます。今後もこの使命を果たすべく、皆様のご意見、ご要望を十分にお伺いしながら、利用し易い共有建造制度とすべく努力して参りますので、なお一層のご支援とご協力をお願い申し上げます。

《趣味》

料理、まち歩き

《略歴》

1982年4月 運輸省入省

2018年7月 国土交通審議官

2019年7月 国土交通省事務次官

## 『共有船建造工程予定一覧表』をJRTTのHPに掲載！

JRTTの共有船（旅客船、貨物船）に関する様々な情報をJRTTホームページ（HP）の『共有船建造工程予定一覧表』に掲載いたしました。どのような種類のJRTTの共有船がいつ頃竣工するのか、などわかりやすい一覧表になっておりますので、興味のある方は、ぜひご覧ください。

⇒詳しくは、[こちら](#)

また、竣工したJRTTの共有船につきましては、『竣工船フォトギャラリー』のコーナーにて、素敵な写真を公開しております。

⇒詳しくは、[こちら](#)

男性記者（M.E）



布川海運(有)「第二十二海福丸」



中央海運(株)「第八瑞豊丸」

## 編集担当者のひとりごと

コロナウイルス感染症が5類になり、今年は野外イベントを楽しむつもりです。JRTT本社界限では、JAZZ、花火、大道芸などのイベントが毎週のようにあります。

例えば、10月7日～10月8日に日本最大級のジャズ・フェスティバル「[横濱JAZZ PROMENADE](#)」があります。多くのJAZZイベントによる街角ライブは無料で鑑賞できます。この2日間、各ストリートからは引切りなしにJAZZの演奏が流れ、体が勝手にswingしちゃいます。

一方、[横浜の花火や夏祭りのイベント](#)は、7月31日「みなとみらいスマートフェスティバル」、7月29日～8月27日「[Red Brick Island 2023](#)」などがあります。花火のおすすめは、7月31日の19:30から、25分間にわたり約2万発がこれでもかと打ち上げられ、すごい迫力です。これらの夏秋イベントでは、横浜の文化的な魅力を存分に楽しむことができると思います。ぜひ、足を運びください😊

(男性記者T.S)

### ■本ニュースレターに関するお問合せ先

独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構 共有船舶企画管理部 企画課

TEL:045-222-9129 Email: ship\_pr-b6k3@jr-tt.go.jp

※本ニュースレターは2023年6月30日時点の情報を基に作成しています。